

甲賀市の文化財⑭

水口細工

文化・自然へのとびら

「葛」という自然の素材を用いて、繊細な細工を施す近世水口宿に花開いた民芸品に「水口細工」があります。

これらの民芸品は、水口宿の発展とともに街道の名産品として町人だけでなく、水口藩士の内職として作られ、往来を行き交う人々の

土産として人気を博していたのです。

水口細工のようにツヅラフジや葛で編んだものを一般的に「葛（くず）編み」といいます。葛編みは正倉院の宝物のなかにもあるように、奈良時代から作られ、生活のなかで使われてきました。

なぜ葛編みが水口で盛んに作られ始めたか、その起源は詳しくはわかりません。ただ、江戸時代に書かれた多くの書物にはすでに水口の名産であることが記されています。

また、藩主の贈答や献上、宮中の大嘗祭や新嘗祭、伊勢神宮の式年遷宮などに際しては、特別製の水口細工が作られました。

明治6年には、オーストリアのウィーンで行われた万国博覧会に出品し、海外、特にアメリカ合衆国に販路を広げました。

伊勢神宮への水口細工の奉納は昭和28年の式年遷宮まで続けられました。次は昭和48年の式年遷宮からは埼玉県在住の竹藤工芸の職人が伊勢神宮の依頼を受け、かつての水口細工を再現し奉納されています。

現在、水口中央公民館の講座のひとつとして、水口細工の良さを見直し、復元する試みがなされています。ただ、当地では技法を伝承する人がいないため、どの蔓を使っているのか、どうやって編ん

でいくのかというところから始められてきました。試行錯誤の末、縦の丸蔓はアオツヅラフジ、横の割蔓は葛（くず）であるという事など、さまざまなことがわかってきました。

そしてアオツヅラフジは、冬の間に収穫し、乾燥させ節を取り、熱湯に数日浸しておき、外皮を取り除きます。一方、葛は夏の間に収穫し、煮て2つに割り外皮を取ります。さらに、米のとぎ汁に一晚浸け、天日に晒す作業を3、4回繰り返して、湿っているうちにナイフで薄く削いでいくなど、素材にも細心の注意がはらわれていることなどがわかってきました。

これらを独特の編み方によって一つひとつの工程をこなし、水口細工はできあがっていくのです。

ビニールやプラスチックの出現によって横に追いやられ、ついに生活から消えてしまった水口細工ですが、古い技法を再現しながら水口細工を甦らせようとする試みが続けられています。

水口細工は水口歴史民俗資料館に展示していますので、ぜひご覧ください。

「問い合わせ」
文化財保護課

☎ 86-86026
FAX 86-83880

横田渡の渡し船

甲賀市域を東西に貫通する東海道、その西の入り口が「東海道十三渡」の一つ「横田渡」です。「京発ち石部泊まり」の言葉があるように、健脚だった当時の旅人もこの川渡しは避けて通れませんでした。三雲側と泉側には当時の常夜灯が残り、泉側のもは文政5年(1822)の建てで東海道随一の規模を誇っています。

横田渡は幕府道中奉行の管理下地元泉村が運営。冬の渇水時を除き4艘の渡し船を運航し人馬や荷物を運びましたが、船渡しの主役である渡し船の実態はあまり知られていません。そこで泉区古文書をひもとくと、色々なことがわかってきました。

異例なのは、まず船の建造や修理が京都伏見の船大工によって行われていることです。江戸時代の近江は湖上交通が盛んで、大津など湖畔には船大工の拠点が多くあったのに、その関与が見られないのです。二つ目は船の規模です。全長は約12.6メートル、幅は2.6メートル、船板の厚みは6セ

市史の小径

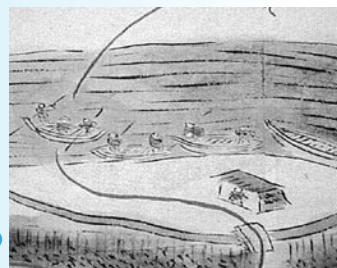
第11回

街道を歩く その2

ンチを越えており、川渡し船としては大型の部類で、これに乗客20人と馬3疋を乗せました。三つ目は船の素材が地元の杉ではなく、利用に規制があった桧だったことで、材料も職人も全て伏見で調達するなど特別な扱いがうかがえます。

こうして建造された船の耐用年数は15年ほど、洪水で下流に流されることもしばしばで、船中で馬が暴れて荷

物を落とし、詫び状を書かされたことも記されています。



4艘の渡し船
(泉区有文書)

【問い合わせ】総務課市史編纂係
☎ 86-8075 FAX 86-8380